

野宿生活者への歯科支援活動報告（第3報）反貧困相談会における生活困窮者に対する歯科支援

○渡邊充春¹⁾, 吉村博孝²⁾, 安藤純夫³⁾, 江原照野²⁾

¹⁾医療法人南労会松浦診療所歯科, ²⁾歯科保健研究会, ³⁾大阪市立弘済院付属病院歯科, ⁴⁾安藤歯科医院

要約：野宿生活者に対する歯科相談の結果では、欠損歯が多く食生活や求職活動に多くの障害となっていることがわかってきた。近年、野宿生活者に若年層の増加が見られ、一方、派遣切れなどで仕事を失う生活困窮者も増えてきた。「反貧困相談活動」での歯科相談では、欠損だけではなく歯科的課題も現れ、野宿生活者、生活困窮者（野宿に至った者、至る恐れがある者）に対する歯科支援活動が必要であることが明らかになった。（索引用語：野宿生活者、生活困窮者、歯科支援）

口腔衛生会誌 59 (4), 2009

目的：

歯科保健研究会では2004年から、釜ヶ崎地区での日雇い労働者、野宿生活者に対する歯科相談を実施し、更に大阪市内、大阪府下、更に兵庫、京都、徳島など関西一円での歯科相談を行ってきた。釜ヶ崎地区内では特別清掃事業に従事する労働者への健康相談や、夜間緊急宿泊所（シェルター）に宿泊する野宿生活者への生活改善事業の一環としての健康相談活動である。大阪市内での公園での生活健康相談やビッグイシュー販売員への健康相談、更に府下での巡回生活相談事業へ同行しての健康相談である。野宿生活者の口腔内の診査を行い、紹介書を作成し、歯科受診へつなげる相談活動を続けてきた。従来は、日雇い労働者で、失業や、病気により野宿を強いられた者が過半であったが、最近は解雇者や派遣切れなどの「生活困窮者」が、相談に来る機会が多くなってきた。今回このような「生活困窮者」に対する相談活動での歯科相談を担う機会を得たので報告する。

方法：

2009年3月21日22日の2日間、「反貧困・春の相談会 in 大阪」(主催反貧困ネットワーク大阪実行委員会)が大阪市役所横の歩道と中之島公園で行なわれた。生活・労働・福祉・医療・歯科相談コーナーが設置された。特に「女性」の相談コーナーも設置され、「電話相談」も行なわれた。参加ボランティアは延べ300名が参加し、相談者は151名(内女性が15名)、電話相談が61名の計212件の相談が寄せられた。歯科相談は従来の野宿生活者への相談と同様の方法を取り、口腔内の診査を行い、治療希望者には「歯科紹介書」を作成し、口腔清掃指導をあわせて実施した。

結果：

歯科相談者は、15名(男性14名、女性1名)で、平均年齢は56.6歳(29歳より78歳)だった。20歳代から40歳代が各

1名、50歳代は5名で60歳代が6名などであった。今回の相談会は、「日比谷派遣村」で呈したホームレス者の排除を行わず、門戸を開いたため、居宅形態では居宅は4名で、ほかには野宿、ドヤ、シェルターなどであった。この一年間に職を失ったものが5名であり、この間の失業・解雇問題の状態を反映したものとなった。国民健康保険を所持する者が3名いたが、負担金を払えず、受診を断念しているとのことであった。口腔内の状態としては、全体では現在歯13.8本、健全歯6.7本、処置歯3.7本、未処置歯3.3本、欠損歯14.5本であった。40代までの3名では欠損歯1本で、50歳代より急速に欠損を生じており、義歯の作成の必要ないものはわずかに2名のみであった。今回は、生活困窮者に対する対応として、生活保護の緊急活用を主要な方策としてとったため、全体の相談者で84名が、生活保護の申請を行っており、歯科相談者のうち9名が生活保護の申請となった。

考察：

昨年の第57回の本学会で報告したように京都地区での野宿生活者を対象にした相談会では、07年度15名の平均年齢は62.6歳で、欠損歯数は20.2本に達していた。多地区や釜ヶ崎地区内でも同様の傾向であるが、釜ヶ崎のシェルターでの相談者は年齢も若くなり、口腔内の状態も欠損歯数は減少の傾向にある。健康保険を所持するものもいるが、歯科治療受診の負担金の負担や継続的な治療継続の条件を有しているものはきわめて少ない状態である。今回の相談会での20歳から40歳までの3名の相談理由は、検診と補綴物の脱離であった。このような健康維持についての意欲も現在の「生活困窮」の状態では、健康保持につなげることはきわめて困難である。今回追求された「生活保護」の緊急申請による住居や生活の確保も解決の方法であろう。従来の野宿生活者に対する相談、歯科支援活動とあわせ、生活困窮者への歯科支援活動の継続が必要である。